



現場で木材の伐採から運搬までを見学

木質バイオ 発電の燃料

効率的集材目指して

天瀬町のグリーン発電 現地研修会で検討

県西部振興局などは28日、(株)グリーン発電(森山政美社長)が11月から日田市天瀬町で本格運転に入る、木質バイオマス発電所への未利用材安定供給体制と森林所有者への利益還元システムの構築を目指し、高性能林業機械を使った効率的集材方法を検討する現地研修会を開いた。

同日、日田木質資源有効利用協議会、大分西部流域林業活性化センターが主催。同市鶴河内でスキ材60年生を6センチで伐採している山林で、同協議会員、県や市の林業担当職員、森林組合などの約60人が参加。滝口定義局長は、「県は、年間の県産材生産量100万立方メートルを目標としている。木質バイオマス発電所を活用することで山林の整備と林業活性化を図りたい」、久積俊

晴同協議会長は、「森山社長の見学した。伐採は日田市森林組合が受託し、作業は同市大山町の(株)M.C.河津(河津修一郎社長)が請け負っている。

意見交換会では、集材作業従事者から「未利用材を活用するようになったので、最近では根元部分の林地残材が少なくなったが、仕分けなどで作業が増えた」「枝葉だけでは単価が安く、採算が合わない」との意見があった。藤本浩司局長

村振興部長は「研修はきょう始まったばかり。今後、間伐などの研修会も重ねながら、効率的な集材方法を構築していきたい」と話した。

同発電所は出力500キロワット、未利用材使用量は年間10万立方メートルを見込む。在試運転中で、11月から本格稼働する。

(長尾)